

---

# 冬ギツネ

嘉月天空

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

冬ギツネ

### 【Nコード】

N9413A

### 【作者名】

嘉月天空

### 【あらすじ】

視点を変えつつ、冬ギツネにまつわる物語を展開して行く童話調のお話です。ぐるぐる視点が変わりますが、一応各サブタイトルが視点の主です。物語の骨格にあたるキーワードと、キャラクターの名前は、友人が考えて提供してくれたものです。

## 子ギツネ

「ここからずっとずっと北の国では、「雪」という氷の花が降るのだそうよ」

おかあさんギツネが優しい声で、いつもの物語をボクたちに語って聞かせてくれました。

「おかあさんは「雪」を見た事あるの？」

ボクが聞くと、おかあさんギツネは笑いながら首を振りました。

「いいえ、坊や。私は本物の「雪」を見た事はないわ。この話はね、ずっとずっと昔に、おとうさんギツネの一族がずっとずっと遠い北の国から、暖かい土地と豊かな食べ物を求めて南に来た時から語り継がれてきた話なのよ」

おとうさんギツネは、ボクや、ボクの兄弟たちがまだ小さかった時にどこか遠い所に行ってしまったのだそうです。

「ボクもそのずっとずっと遠い北の国にいつか行ける？」

「ボクも！」

「アタシも！」

ボクの兄弟たちも即座に声を上げました。

けれど、おかあさんギツネはやっぱり笑ったまま、ゆっくりと首を振ります。

「いいえ、いいえ、坊やたち。そんな馬鹿な事を考えるのはおよしなさい。「雪」はそれは綺麗なのだそうだけれど、「雪」に掴まっ  
て眠ってしまうと起きられなくなってしまうのよ。それにそんな遠い国へなんてとても行けないわ」

おかあさんギツネはボクたちの体を舌で舐めてくれながら、続けました。

「おとうさんギツネの一族だって、長い時間をかけてこの南の土地に来たんですからね」

そう聞いて、ボクは残念な気持ちになりました。

だって、「雪」の話はボクが大好きな話だったから。

その時、鼻に焦げ臭いにおいがちらつきました。

おかあさんギツネもすぐに気付いたようで、ピンと耳を張って辺りの音を聞き取り始めました。

おかあさんギツネがこうし始めたら、ボクたちはじっと固まって、物音を立てないでいなさいと教えられていました。

だからボクたちは、その通りに、じっと固まって、物音を立てないでいました。

タ　ン、という高い音がして、おかあさんギツネが地面に伏せた時も、その通りに、じっと固まって、物音を立てないでいました。

## クラティシア

私はクラティシア、と呼ばれるメスライオンだ。みんなには縮めてラティ、と呼ばれる事が多い。

というのも、私は旅興行をするサーカスのライオンなのだ。だからこんなに長くて妙な名前がついている。

ある日、このサーカスにいつぴきの子ギツネがやってきた。もちろん子ギツネが勝手に出歩くわけもない。

連れてきたのは、このサーカスの娘のひなた嬢ちゃんだった。

ひなた嬢ちゃんが他の団員に話すのを漏れ聞いた所によると、どうやらその子ギツネは親ギツネや他の兄弟ギツネと共に、森で撃たれて倒れていたらしい。

兄弟や親の体に挟まれていたせいかわ傷が浅く、その子ギツネだけが奇跡的に助かったのだそうだ。

タチの悪い奴らが面白づくに殺したのだろう、酷い事をする、とても怒っていた。

私も同感だった。私たちライオンならそんなことはしない。

その子ギツネがようやく回復し、初めて私の檻の前にやってきた頃には、サーカスはその子ギツネの故郷から遠く離れた場所にいた。

子ギツネは、くりゆい、という名をつけられた。

小さな体で、恐れ気もなくなつてくるくりゆいを、私は邪険に出来なかった。

頻繁にやってくるくりゆいに、私はよく他国の話をしてやった。

東国の話、南国の話、西国の話。

中でもくりゆいが興味を示したのは北国の「雪」の話だった。

何でも、くりゆいは母ギツネによく「雪」の話を聞いていたらしい。

しかし、くりゆい自身は南の方に住んでいたので、「雪」というものを見た事がなかったのだそうだ。

私は「雪」とは空から降ってくる冷たい花で、一見美しいがその寒さや降り積もった雪の起す雪崩は筆舌に尽くしがたい恐ろしさなのだ、と説明した。

母ギツネとの思い出の話でもあると聞いたので、少しばかり「雪」の美しい面を強調しすぎたのかもしれない。

くりゆいには見事に都合よく美しい部分しか伝わらなかった。

本物の「雪」を見た事がなかったのがそれに拍車をかけたのだらう。

今、サーカスは北国に向かっていて、と言った途端暇になると外に出て、いつ憧れの「雪」が降ってくるかと、じっと空を見つめるようになってしまった。

今はまだ良いが、じきに雪の深いあたりに行く。

もしもくりゆいが荷台から落ちたり、うっかり外で眠ってしまったら、と私は気が気ではなかった。

冬ギツネ

幸い、普段ならばもう雪がちらつく頃であるというのに、まだ降っていない。

団長も首をかしげつつ、旅足が鈍らないのを喜んでいた。

結局、非常に珍しい事に、普通であれば雪が深くなる辺りの街まで来ても、雪は降らなかつた。

みんなが珍しい良かった、と安堵する中、くりゆいだけが耳と尻尾を垂らしていた。

## ネージュ

たまには、と雪を降らさずにおいてやったというのに、街の連中やいつもこの時期やってくるサーカスの一座は感謝の言葉ひとつ述べやしない。

雪の精霊というのは何とも損な役回り！

こんなに綺麗で美しく、ひとつとして同じ形のないように細心の注意を払って結晶を舞わせても、みんな恨み言しか言わない！

確かに雪が降れば寒くなる。

でもそれは水を凝固させるのに必要な事だ。

春になれば雪解け水は沢を潤すのに、人間共は文句しか言わない！

子どもたちだってそうだ。

喜ぶから張り切って降らせてやれば、すぐに飽きてケチをつける。

動物もそう！ 寒い寒いと大騒ぎをしてさつさと冬眠してしまう。

私が彼らの寝床の上に、厚い雪の布団をしいてやっているというのに、春になればその恩も忘れた顔で「やっと春になった！」

……本当に本当に、雪の精霊なんてやっていてもひとつも良い事はない。

アタシの銀のドレスだって、見る者だっていやしない。

みんなアタシを見るなり顔をしかめて逃げていく。

冗談じゃない！

こんなに綺麗な雪なのに！

何でこんな嫌な思いばかりしなくちゃいけないんだろう！

いつものようにぷりぷり怒りながら、アタシはサーカスのテントに入る。人間たちには見えないが、動物にはアタシの姿が見えるのだ。

感謝すらしない連中に嫌がらせをしてやろうと思ったのだ。

まっ先に会ったのは小汚い子ギツネだった。

見ない顔で、向こうもアタシが何者なのか解らないようだった。

「アタシは雪の精霊、ネージュよ」

「じゃああなたが、空から降ってくる綺麗な冷たいお花の精霊なの？」

子ギツネは眼を輝かせてそう言った。

アタシはびっくりしてしまった。

「冷たいお花を降らせて！ ボク見た事がないんだ」

子ギツネはそう言った。

ふん、口が良いのも本物を見るまでの事。

どうせこの子ギツネも他の連中と一緒に！ 雪を見たと勝手に嫌がるに決まっている。

そう思って、子ギツネに見せるために雪を降らせてやった。

今まで降らせなかった分まで降らせてやった。

綺麗に形作った結晶を山程！ 一昼夜休まずにずっと！

雪は全てを多いつくし、街は雪にうずもれて美しく白くなった。

人間たちは慌てふためいたが、良い気味だ、と思った。

アタシはどうだ、と子ギツネの所へ言いに行ってやった。どうだ、お前が物も考えず言った科白がこうなったのだと。

「凄い凄い！ 本当に空から綺麗なお花がたくさん降ってきた！」  
子ギツネの返答はこうだった。

雪が降っている間外にいたのだろうか。  
小汚い毛並みだった子ギツネは、いつの間にか雪と同じ銀色の毛並みになっていた。

「雪を降らせてくれて、ありがとう！」  
子ギツネがそう言って笑うので、アタシは言葉につまってしまった。

今までになかった事だ。  
産まれて初めて感謝をされた。

アタシはどうしたら良いか、分からなくなってしまった。

## くりゆい

どこか遠くへ行ってしまったおかあさんギツネや、サーカスのラ  
ティおばさんから話を聞いていた「雪」は、とっても綺麗なもので  
した。

ボクは夢中になって、外を走り回ってしまいました。  
走っている内に、小さくて綺麗な雪の結晶が、体にしみこむみた  
いに、毛色が銀になって、とっても体が軽くなりました。

降らせてくれたのは、ネージユと名乗るとっても綺麗な雪の精霊  
さん。

雪の照り返しの色をした、ひなたちゃんが空中ブランコをする時  
のようなふわふわした服を着ていて、髪は月光に煌く川面のような  
冷たい色。

虹彩もしんとした夜のような綺麗な冷えた色。

つんと澄ましたネージユは、ボクよりずっと小さくて、初めて見  
た雪にそっくりな可愛い女の子でした。

ボクは、とつてもとつても綺麗な空から降るお花を見せてくれた  
お礼がしたくて、ネージユちゃんに何が欲しいか聞きました。

そう、ラティおばさんのお話に出てくるような、恩返しをしたか  
ったのです。

「ボクにできる事は何でも言っつてね」

けれど、ネージユちゃんは何にもお願いがないと言いました。

雪を降らせたのも、街の人が慌てるのが楽しかったからだって。

他に遊ぶ事もないし、つまらないから、人間や動物をからかって遊ぶんだって。

だから、ボクは言ったのです。

「じゃあボクがずっとネージユちゃんと一緒にいるよ。ボクと一緒に遊ぼうよ」

ネージユちゃんはびっくりしたみたいでした。

「無理に決まってるわ！ 第一アンタ空も飛べないじゃない！」  
と大声で言いました。

でもボクは、雪を見てからずっと体が軽くなったみたいだったから、空だって飛べるような気がしてたんだ。

## クラティシア

いつものいたずら者の雪の精霊がテントにやってきた時、サーカスの動物たちは一斉に雪の精霊を無視した。

冷たい雪を降らせ、それをありがたいと思うように？

冗談ではない。

少しなら綺麗でも、積もるほど多い雪には困りものだ。

サーカスは移動できないし、寒くなるし、春になれば雪解けの鉄砲水が起こる地域もある。

そして、時には生き物を凍えさせて、命を奪ってしまうのだ。

私も例に漏れず、さっさと狸寝入りを決め込んだ。

じっとしていれば、飽き性の雪の精霊はさっさと帰ってしまう。

いつもの事だ。

そう、いつもの事。

唯一の例外は、雪の精霊を始めてみるくりゆいがいたという事だ。けれど、私はそれに気付けなかった。

翌日、突然大雪が降った。

テントの端にいたくりゆいは、雪が降り出すなり、外に飛び出して行ってしまった。

咄嗟に捕まえようと思った時には、檻より遠くに行っていて、捕まえる事は出来なかった。私は慌てて声を上げた。

「くりゆい！ 危ないよ！ 早くテントにお戻り！」  
声を張り上げて、くりゆいに声が届いた様子はない。

深々と降り積もる雪が、音という音を全て吸い取っているようだ。  
私は雪の精霊を噛み殺してやりたくなった。

「くりゆい！ 凍えちまうよ！」  
私が張り上げる声に、周囲の動物たちが気付いて、同じようにくりゆいに呼びかける。

人間のいる家は遠くて、声は届かない。

「くりゆい！」

くりゆいは気付かずに、雪の上を転げまわっている。

「くりゆい！」

ひたり、とくりゆいの体に雪の銀が染み入った。

「くりゆい！」

雪の結晶のひとつひとつが染み入るように、くりゆいの茶色の毛並みを銀に変えていく。

「！」

声が聞こえない。

視界が銀一色に染まる。

くりゆいはやがて完全に銀色の毛並みになり、雪と同化して見えなくなった。

「 ! ! 」

どうして檻の中でしっかり捕まえておかなかったんだろう。  
あんな小さな子ギツネだったのに。

そうした後悔の気持ちすら吸い取るように、雪は、今まで見た事  
もないほど深く、深く積もって行った。

## ひなたの日記

12月24日(月) 雪

この街に來ると、ほんの少しの間だけわたしたちのサーカスにいた、小さなキツネの事を思い出します。

もうずっとずっと昔の事で、名前もすっかり忘れてしまったけれど、可愛くて人懐っこいキツネだったのを覚えています。

そのキツネは、この街に來たらどこかへ消えてしまいました。足跡ひとつ残さずに。

ちょうど稀に見る大雪の日で、子ギツネだからと檻にも入れていなかったのに、知らない間にどこかへ行ってしまったのでしょうか。悲しくて悲しくて、泣き明かしました。どうしてちゃんと見張っていなかったのかと後悔しました。

子ギツネに最も構っていたラティも悲しそうでした。もうラティもいなくなってしまうたけど、思い返してみると、彼女もわたしと同じように後悔していたのかもしれない。

こんな雪の日には、感傷的になってしまつものですね。

そういえば、街で面白い噂を聞きました。

毎年雪の日になると、銀ギツネが出るそうです。大層美しい毛並みの銀ギツネで、街では雪の精ではないかと噂されているのだそうです。

そんな話を聞いたから、こんなに昔の子ギツネの事を思い出すの

かもしねませんね。

もちろん、あの時のキツネだなんて思っていないません。だってあのキツネは普通のキツネと同じ、茶色の毛並みだったし、それにどんなに長生きのキツネだって、もう生きているはずありません。

そうそう、雪の日に出る銀ギツネですけど、そのキツネには名前があるんだそうです。

『冬ギツネ』と言ったそうですよ。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9413a/>

---

冬ギツネ

2008年8月29日19時38分発行